

総合的な学習の時間部会

<県研究主題>

生徒一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 柿崎 順子（横浜地区）

<研究主題>

この仲間ではかつかれない修学旅行をみんなの手で

～小学校の学びを活かし、中学だからこそできる『総合』をめざして～

1 提案内容

(1) 小学校との関連をもたせて修学旅行をどうするか考える

- ① 小学校の総合を知る
- ② 子どもの想いを知る
- ③ 身につけたい力やゴールを明確にする
- ④ 材を徹底的に研究する

(2) 修学旅行を探究的な学びにするために

- ① 単元で育成したい資質や能力及び態度
ア、学習方法に関すること
イ、自分自身に関すること
ウ、他者や社会との関わりに関すること
- ② 子どもの願いにそって考える

(3) 琉球フェスティバルin老松

ねらい・・・みんながいまより沖縄通になる・みんながいまより沖縄に行くのが楽しみになる・みんながいまより仲間になる」

当日の発表を通じて、横浜との違いを実感したり、仲間の興味関心を高められるよう工夫した取り組みがあった。「学ばないまま自分で沖縄に行かなくてよかった」と生徒の感想。

(4) 行きっぱなしの修学旅行にならないために

- ① 現地でのプログラムの工夫
- ② それぞれが課題をもって参加できるための工夫

(5) 教科学習との関連

美術科「しおり表紙絵作成」、音楽科「沖縄民謡 安里やユンタ」、保健体育科「野毛山ソーラン」、英語科「my school trip (英語スピーチ)」、国語科「国際平和スピーチにむけて」等、教科担任制である中学校の各教科の専門性を活かし、教科で関連する学習に取り組めた。

(6) まとめ

3年はこれから、それぞれ自分の進路選択という大きな課題に向かい、修学旅行等、これまでの学びを生かし、自分をみつめ、自分の思いをしっかりと伝える力、自分の将来を考え、進路を切り開いていく力をつけていけるような学びをつくりあげていきたい。

2 協議内容

(1) 質疑応答

Q、修学旅行先は毎年沖縄か。

A、今までは九州方面（飛行機を使った旅行）だったが、ちょうどこの学年が1年生のときに見直す機会があったため、沖縄に変更になった。

Q、ピース三箇条の「平和を学ぶべし」と書いてあるが、フェスティバルの中身は平和をテーマにしたものは少ないように感じた。生徒にはどのような意図を持って指導したのか。

A、平和については全員に学ばせたいという教員の共通の思いがあった。

- Q、生徒はどれだけの「こだわり」をもって修学旅行に取り組めたか。
- A、それぞれに課題を持って取り組む様子はみられたが、教員側の一人ひとりの「こだわり」をひろえる努力はまだできたと感じる。
- Q、一人ひとりの「テーマ」は色・芸・平和などであったが、あらかじめ教員側が提示したのか、生徒自ら考えたのか。
- A、生徒に課題として出したレポートの内容は一人ひとりバラバラのテーマであったが、それを教員がいくつかの分野に分類してその中から生徒に選択させた。
- Q、教師同士で理想の生徒像の話し合いはどのようなタイミングで話し合われたのか。
- A、職場体験終了時期の学年会でKJ法を利用し行った。
- Q、小学校でどんな総合をしていたのかと生徒に問うた目的は何か。
- A、生徒がどんなことを学びどんなことが心に残っているのかを知りたかったため。力を入れている小学校は、どんな児童に育ててほしいのか職員間で共通理解ができていた。
- Q、今回の修学旅行とキャリア教育はどのようにリンクするのか。
- A、様々な人の生き方に触れる機会にしたい。
- Q、修学旅行で沖縄の文化に触れたことで生徒の変容はあったか。
- A、すぐにはみられないが、感想文から心は落ち着いてきているように感じる。

(2) 小中連携について、各校のとりくみや困っている点について

- ・横浜の事例・・・横浜では研究員中心に進め、小学3年から取り組んでいる。小学校は各学級、中学校は各学年で取り組んでいる。資質や能力の面を情報交換し連携することは可能。
- ・小学校と中学校では身につけたい力が異なるが、それらをどうつなげて指導していくのか。今回の提案について、探究的な学習として本当に成立し、沖縄で学べて良かったで終わっていないか。そこから地元横浜の戦争につなげたり、平和についてどのくらい深まりがでたのか・・・と発展させると良いのでは。そのために、小学校でこんな取り組みをしてみても連携し合えるのが理想。
- ・相模原の事例・・・昨年は小中合同で情報交換をした。情報交換の手順としては、①どんな取り組みをしているのか一覧表に○をつける ②小中で重なってしまっているところがないかチェックをする ③それぞれの役割を話し合う ④情報交換の内容を各学校に送付した。約一時間半ほどの情報交換だが足りないほど充実した会になった。情報活用の能力について・・・小中ではほとんど同じであることがわかる。次回行う時は、小中ではどれができるのか調査したい。

3 まとめ

横浜は小中で一緒に取り組んでいる。

- ・特別活動と総合的な学習をどう考えるか。
もともと修学旅行は特別活動の枠である。さらに探究的な取り組みにするのが総合的な学習の時間になる。
- ・時間数の問題。部分的に総合的な学習と特別活動を分けて行っている。
- ・担当者が変わると文書から見えない想いまでは引き継がれないのが中学校の問題である。担当者が毎年変わらず同じであれば問題はない。
- ・今回の事例は2年生からの取り組みのため、探究のサイクルは2周している。しかし実態を見ると、ほとんどは一周して終わってしまっている。
- ・修学旅行終了後の次の課題を考えたとき、例を挙げると、沖縄から地元横浜につなげるのが理想であるが、時間数が足りないのが現状であり、横浜市の問題であるように感じる。

| | |
|--------|---------------------|
| <研究主題> | 探究する力、発表する力の向上を目指して |
|--------|---------------------|

1 提案内容

海西中学校では体験活動を重視し体験学習・キャリア学習・環境学習を相互にリンクした横断的な学習を実践するために、テーマを「体験・将来・環境を見つめる」としている。

また、「探究的な学習としての充実」や「言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動」を重視するために、①自己課題が設定できる②自己課題を深め探究できる③発表できる生徒の育成を目指している。

(1) 研究内容

3年間の総合的な学習の時間の活動が、体験活動を行うだけでなく、問題の解決や探究活動の過程に位置づけ、言語による分析、まとめを行うことができるように研究してきた。

そして「人とのかかわりのなかで学ぶ経験」を重視しているため、修学旅行を農村生活体験ホームステイという体験型・民泊型にしたことで、3年間を通じた人・自然・社会との関わりによって、どのように「探究する力、発表する力」の向上を目指したか述べる。

①単元名 海老名とは違う日野町の文化や生活環境を人とのかかわりのなかで知ろう。

②単元で身に付けたい資質・能力や態度

〈学習方法に関すること〉

地域の文化や環境について調べ、そのなかから課題を設定する。

体験したり学んだりしたことを効果的な方法で発表する。

〈自分自身に関すること〉

自らの生活の在り方を見直し、日常生活の中に生かす。

〈他者や社会とのかかわりに関すること〉

人や自然との積極的なかかわりを通して、環境保全について考え実践する。

(2) 研究の実際

①課題設定と事前学習

- ・滋賀県日野町について宿泊班ごとに調べ学習を行い、ポスターを作成・掲示する。
- ・滋賀県や日野町の環境問題についてPCで調べ、現地でする環境保全を考える。

②情報の収集（農村生活体験ホームステイ）

- ・事前に学習した課題について取材や体験をする。
- ・地域の環境保全を考えた活動をする。

③情報の整理・考察・まとめ

- ・体験を通して得たことをまとめ、お礼状を送る。
- ・環境保全活動の感想等を話し合い、ポスターを作成・掲示する。
- ・体験内容をパワーポイントでまとめる。（簡潔に文字は短く）

④表現

- ・本当に伝えたいことを、自分の言葉で発表する。

(3) 研究の成果と今後の課題

- ・日常生活でもPDCAを意識したことで、体験の中で効果的に課題の探究ができた。
- ・体験を通して自分の生き方について深く考え、環境についての学習効果があがった。

- ・各教科での言語活動や構成的グループエンカウターの効果もあり表現力が向上した。
- ・今後は、総合的な学習の時間検討委員会で実践上の課題に応じて指導体制を見直す。

(4) 質疑応答等

- ・学年で取り組みの差がでる場合があるが、学校での共通理解はどうしているか。
→各学年担当との確認や、今後は検討委員会を通して共通理解を図ることができる。
- ・環境学習ポスター作製やPCでの体験内容発表の意図は何か。
→学習・体験内容の違う生徒がより深く学ぶためと民泊体験を保護者にも伝えるため。
- ・民泊する家庭の決め方と課題設定のための日野町の事前学習はどのようにしたか。
→家庭については教師側で決め、教科で日野町に関心を持たせるための学習をした。
- ・子どもたちが主体的に行動できるようにするための工夫は何か。
→エンカウターを通した子ども同士の間関係のつながりから主体的に取り組めた。

2 協議「探究的な学習を充実させるために体験活動をどう位置づけるか」

- ・キャリア教育については、市で職場体験のリストを持っていて、希望したところは市がお願いしてくれる。探究的な学習を体験活動と結びつけることは今後の課題。
- ・平和学習中心に実施し修学旅行も広島であるが、鎌倉校外学習の位置づけが難しい。
→環境学習として、鎌倉の野生のリス問題や景観保持のための取材などを取り入れた。
- ・修学旅行での体験学習で、子どもの課題に合う体験先を確保することが課題である。
→子どもの課題に合う民泊先に振り分けることができない部分もあった。
- ・自分たちの地域と鎌倉や奈良・京都などを比較し、それをどのように地域にかえすか再度課題を設定していくことができるようにしていきたい。

3 まとめ

生きる力を育むために横断的・総合的なものとして必要とされ、学習指導要領改訂に伴い、より明確な位置づけになり、新たに章立てされ目標がはっきりと示された。探究的な学習・共同的な学習ということを確認した上で、体験重視の学習を系統性をもった活動にしたこと・検討委員会で成果と課題を考えることで、今後もより改善が進むと考える。

4 協議「探究的な学習を深めるための課題の設定の工夫について」

- ・学校として子どもにどんな力をつけさせたいのか考え、計画に則って教職員全体で動いていかなければならない。そして教職員の事前の仕込みがとても重要である。
- ・体験活動を2回実施し、1回目の課題発見により、2回目の体験が充実する。また、本気になって課題の追究ができるように、安易な気持ちで課題を設定させて体験させないなど、ある程度教師側がねらいをもって子どもをのせていくことも必要である。
- ・子どもに考えさせるためには、どんなことを考えつくかシミュレーションを行い、教師が生徒の状況を把握しながら、しっかりと準備をしておかなければならない。また、教師と子どもが同じひとつの方向に向いていることも重要である。
- ・発表することで新たな課題が生まれてくる場合もある。教師がしっかり仕込みをして目標を達成するために内容の精選を行う必要がある。教科との連携をしながら1～3年と軸のある指導体制が重要である。
- ・最初に課題設定は難しい。体験による失敗が大事で、それが個人の切実な課題になるのではないかと考える。子どもが主体的に体験して学んでいくものなので、課題を設定する力を身に付けさせることが実際の課題である。